編集者：アンドレア林康政

受難の主日（A 年枝の主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：行列、入堂式のマタイ福音 21：1-11、ミサ朗読のマタイ福音 27:17－54

イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、村へ子ろばを引いてくると言われた。ろばの上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになり、エルサレムに入られた。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、木の枝を切って道に敷いた。前後に従う者叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」そこで、群衆は、この方はガリラヤから出た預言者イエスだと言った。

イエスは総督ピラトの前に立たれ、尋問された。しかし、祭司長たちや長老たちから訴えられている間、なにもお答えにならなかった。彼らは評判の囚人バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群集を説得した。結局、兵士たちはイエスを鞭打ったから、十字架につけるために引き渡した。イエスの着ている物を剥ぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、て言った。「ユダヤ人の王、万歳！」。途中、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。されこうべの場所に着くと、苦いものを混ぜた葡萄酒をのませようとした。兵士たちはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。さらに、イエスは隣にいる十字架につけた強盗、人々に罵られ、侮辱された。午後三時ごろ、イエスは大声で叫び、息を引き取られた。神殿の垂れ幕が上から下までまっ二つに裂け、地震が起こり、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。百人隊長は、本当にこの人は神の子だったと言った。

(二)カテキズムの響き：『カトリック教会のカテキズム』＃557-560、571-572、 606-607、2605-2606 又は、YOUCAT#94-98

イエスはエルサレムに向かい、死という決意を固められた。イエスはダビデの子、救いをもたらす者として、歓呼の声に迎えられます。ホサナは「救ってください」という意味です。光栄に輝く王であるイエスは、ろばに乗って、入城なさいます。メシアである王がその死と復活に過越しを通して実現しようとなさっているみ国の到来を表します。また「祝福あれ、主のみ名によって来る人に」というこの歓呼を、キリストの過ぎ越しの記念祭の感謝の賛歌（聖なるかな）の中で今でも繰り返しています。十字架の死と復活という過越の神秘は、使徒たち及び彼らに続く教会が世界に告げ知らせるべき福音の核心を成しています。さらに、長老と祭司長に排斥され、人々に侮辱され、鞭打たれ、十字架につけたイエスの受難という歴史的な出来事と教えを、忠実に受け継いできています。神の救いの計画は、ただ一度の御子イエス･キリストの贖いの死によって実現されました。

実は、イエスの全生涯、お遣わしになった御父のみ旨を行い、愛の計画をまっとうするように、人となられ、贖いの受難を受諾し、世に来られた。全世界の罪を償うためのイエスの奉献は、御父との愛の交わりを表すものです。（マルコ 10:45)こうして、イエスの人性は苦しみと死に臨んで、人々の救いを望まれる神の愛の自由で完全な道具となりました。これは、神の子としてのご自分の祈りによって示されます。特に、十字架での最後の言葉を通して、ご自分の霊をゆだねて息を引き取られたときのあの大声に至るまでがそうなのです。罪と死の奴隷であるすべての時代の人類のすべての悲嘆、救いの歴史におけるあらゆる願いや執り成しの祈りが、人となられた御言葉のこの叫びに集約されています。

（三）カテキズムの学び （『コンペンディウム』カトリック･カテキズム要約の番号)

＃112　イエスの過越の神秘とは、イエスの受難、死、復活、そして栄光に上げられることを含むもので、キリスト教信仰の中心にあります。

最後の祈り：『カトリック･カテキズム要約』付録 A―アニマ･クリスティ/キリストに向かう祈り